

故堤正信氏を偲ぶ

佃 雅 文

あれから七ヶ月。このような形で、堤さんのことを書くようになるとは、思いもよらなかつた。いまだ、氏のことを思い浮べるに十分の時間がたつたとは、また、私自身がペンをとるには、いささかの戸惑いを禁じ得ない。この大役には、役者の力量不足ではあるが、大学時代・仕事を通じて、総科の一期生という因縁から、すすめていくことにする。

氏とは、総合科学部の助手として赴任されて以来、私自身では、大学の一年生の秋からで、十一年のおつき合いをさせていただいたことになる。

広島女子大へ移られてから、何度か体調を崩されたとは聞いていたが、無農薬食品を取ること努力され、三年前の中国旅行では、元気なお姿で、ご一緒させていただいた。それから二年後には、中国杭州大学への留学も決まり、元気でやっているとお手紙をいただいた矢先のことであった。返事も出さなまま、訃報を耳にしたのは、九月一日

夕方であった。

九月十九日(木)夜、広島駅に氏の遺骨を迎える。氏が「これをついで歩きまわった」というリュックサックにつつまれて。

九月二〇日(金)、大柿町妙覚寺にて葬儀。

氏は、私たち総合科学部一期生に、地域研究とは……という大きな宿題を投げかけたまま逝ってしまった。

氏との出会いは、一九七四年一〇月に遡る。ヨーロッパの地理の講義であったか。その準備をされていた氏から、地図を運ぶように言われたのがはじめであった。以後、助手と学生。助手と院生。という立場を越えて、兄貴分として私たちに接しておられた。

氏は、地理学専攻であり、私たちは、歴史専攻という分野のちがいはあったが、新設の学部であり、しかも地域文化コース。一体何をすればいいのか。地域研究とは何なのか。従来の学問とどう関連するのか、新しい何か別の方法

論でもあるのか。などという疑問と不安を、一緒になって考えてみようと言われた。そして、専攻はともかく、何でもやってみようという雰囲気、氏との結びつきを一層深めたのだろう。

とかく、頭デッカチになりがちな私たちを外へ連れ出してくれたのも氏であった。氏が関係されていた『高陽町史』の仕事を利用して、日本研究の学生三人（川田君、菅原さん、筆者）は、休日はじめてのフィールドワークと呼ぶべきものを体験した。関係資料のコピーをしたり、切り抜きなどの作業をした後のことであったが、一人が、旧藩政村の一つを担当し、単独行動で、ほうり込まれたのである。他の人は知らず、二年生になったばかりの私にとって、これは刺激が強すぎた。言わば、泳ぎを知らない者が、いきなり飛び込み台の上に立たされ、しかも背中をおされて水の中にほうり込まれたようなものであった。

終日、担当の中深川を歩き回り、多くの方々にご迷惑をおかけした。そして、地理ならば、現在の様子を話で聞くことができるが、歴史学でこういうことは意味があるのだろうかなどと、今思えば幼稚な愚痴が口をついて出てしまった。氏はこういう私たちをどんな眼で見ていたのだろうか。こうして歩いた後は、よくレポートを書くように言われた。白い歯をみせてニタツと笑いながら、「単位なしのレポートありだ」というのが口癖であった。

氏のやり方は、いつもそうであった。すなわち、とにかく一人で歩きまわり、何かを掴む。そこから何を拾ってくるか。これないかは自分自身の生き方とかかわってくる。生き方を手とり足とり教えることはできない。こうした信念で、氏自身、いろいろな地域を歩きまわり、自分自身を鍛えてこられたのであろう。その結果が、遺著ともなった『集落の社会地理』であったのだろう。しかし、その情熱には、今思うと、何か憑かれたものを感じずにはいられない。

また氏とは、よくソフトボールをやった。人数が集まれば、試合を、そうでなければノックをと。「ソフトの腕前は、研究の技量と正比例をする。」これも氏の口癖。氏の結婚式のスピーチで、このエピソードを交えたのも懐しい思い出である。

氏は、学生時代、朝十時に大学へ出て来て、夜十時まで勉強していたと話しておられた。そのためか、総料の研究室でも、夜遅くまで電燈がついていた。その間、氏と様々な話をした仲間も多いことだろう。

氏と読書会を開き、大塚久雄の『共同体の基礎理論』を読んだのも、学部の時だったか。共同体の発展段階が、現実の村落の変化にどのようにみられるのか。理論よりも実践、実証だという幼い議論に常に兎貴分として加わっていた。いただいたこともある。

こうした読書会をもつ一方で、周防大島の小泊に毎年出かけておられた。氏の問題意識については、十分理解し得なかつたが、四年生の秋の一日、小泊を訪れた。みかんの取り入れ作業のお手伝いをさせてもらい、石崎氏の宅で、朝、茶粥をご馳走になった。その米の旨さは、マチの流通米しか食べたことなかつた私にとって驚きであつた。その夜は、打ち寄せる波の音が耳について、寝つかれない自分に寂しい思いがしたことを思い出す。氏自身も「こういう所で、農業をしながら、研究したいなあ」ともらしておられた。数年後、氏の夢は実現し、ご一家で江田島に移住された。何度かお誘いをうけながら、お訪ねできなかつたのが心残りである。

『集落の社会地理』の序論でも取り上げられているが、岩手県煙山村を訪ねたのは、一九七七年であつた。それまでに、氏と、中山、六郷両君をふくめ、中村吉治の『村落構造の史的分析』を毎週一回読んでいた。これは、周知のごとく煙山村を対象にした事例研究である。氏の提案で、私たちがこの煙山村を訪ねることにした。約一週間の予定。旅館に泊りこみ、昼の弁当をつくってもらい、毎日煙山村に出かけていった。初日、とにかく村域を歩きまわつた。ここでも氏は、まず全体が見渡せる所へ行こうと、城内山の斜面を我先によじ登つていった。こうした氏の行動に引っ張られるのみの自分であつた。しかし、こうした行動を

共にすることににより、実地に地域を見るにはまず何をするのかを教えられた。

後年、宮島で古絵図のトレースをしていた際、昼休み、役場の屋根にはい登り、写真をとられたことも相通じるものがあつたのだろう。

女子大へ移られ、私自身も宮島に勤務するようになり、お会いする機会も少なくなつた。しかし、会う毎に、「毎日一人ずつ違う人に会え」とか「とにかく歩け」など、鈍足な自分を叱咤激励していただいた。

氏とは、一九八三年の秋、一〇日間ばかり中国旅行を共にしたのが最後となつた。出発の前、大阪空港のロビーで話をした。少し痩せてはおられたが、心臓の調子もいろいろ歩いておられたらしい。西安華清池で氏と同室となつた。その朝、寝台の上で、体調を整える体操を教えていただいた。その体操のあと、霧のたちこめるなか、捉蔭亭に上がり、一時の散歩をした。山を下り、市内に出てくると、そこはもう朝の賑いをみせていた。中国の朝は早い。街角の露店で、小さい床几に並んで腰かけ、熱い豆腐に舌鼓をうつた。旅行中一番の思い出である。

また、氏のことを地域研究に対する問題意識と関連して思い浮べるほど、整理されていない。そう言えば、二人の子どもさんのことも話しておられた。おそらく氏からも聞

かされているであろうが、結婚される前あるいは当初から子どもの名前は、「サナエ」と「コウサク」にする話されていた。氏の農業に対する考え方、生き方のあらわれであろうか。

また氏は、私が学生の頃から、宮島に関心を寄せられていた。私がたまたま宮島町に勤務することになり、町の歴史を編さんすることになった。前にも述べたが、古絵図のトレースをお願いすることになった。さらには、『歴史と民俗』創刊号に寄稿いただいた。氏なりの宮島の取りあげ方など、いろいろ相談にのってもらったが、十分にそれらを生かしていかない自分にもどかしさを感じる日々である。宮島も七年目。ようやく宮島の奥深さがわかりかけてきた今。こんな時、氏と地域研究の話ができればと、思わずにはいられない。

これは、一期生の宿命かもしれないが、その時に出会った氏によって、「地域研究とは」という宿題が、投げかけられた。そして氏は、その答えをみないまま走りすぎてしまった。

学生時代、「優秀な学者は若死にする。」「三七才がポイントだ」などと、冗談を言い合っていたのが、本当になってしまった。

思いつくまま、堤さんのことを並べた。これはあくまでも、個人の堤さん像である。同じ期時、接しながら、

またちがった堤さん像があるであろう。しかし、堤さんは、その死によって、その像を刻明に私たちの胸にきざみつけていった。残された私たちは、それぞれの堤さん像を抱きつつ、大きな宿題、「地域研究とは」、を考えていく以外にない。

鈍足な自分ではあるが、見守っててください。慎しんでご冥福をお祈りします。

(一九八六年四月記)